

兄の遺志継ぎ立ち上がり

やあもうガリガリ。体はあざだらけで、今なら、だれがみても虐待と分かりますわあ」。悲惨な話もどこかユーモラスに聞こえるが、実態はすさまじかった。靴べらでたたかれたり、ガラスの灰皿で殴られたり、風呂の湯に何度も顔を押しつけられ

やあもうガリガリ。体はあざだらけで、今なら、だれがみても虐待と分かりますわあ」。悲惨な話もどこかユーモラスに聞こえた。まつたぐの素人だった。講演はこの3年間で約180回、聴衆は延べ2万6千人を超えた。まったくの素人だったが、回を重ねるごとに伝える力は上がり、内容は多彩さを増し

窒息死しそうになつたり。児童相談所前に「ポイ捨て」されたこともあった。

てきた。しかし、最初から今まで聴衆が身を乗り出し、会場が静まりかかる場面はいつも同じだ。

ひとつは、中学2年で虐待が終わったときのエピソード。当時27歳の若き女性担任が両親に「虐待してゐるでしょ」と立ちは

けていた。

（敬称略）

「虐待してしまつ大人も助けたい」を掲げ、講演で全国を飛び回る、大阪の映像制作会社長の島田妙子さん。その壮絶な半生をたどる。（あすから2面に掲載します）

編集局次長・松田則章

平成26年(2014)日刊25710号
7/16[水] 夕刊
産業経済新聞(サンケイ)
THE SANKEI SHIMBUN
発行所 ©産業経済新聞大阪本社 2014
〒556-8660 大阪市浪速区湊町2-1-57
☎ 大阪(06)6633-1221(大代表)

16日夕刊から新連載「虐待2000日『妙子と小兄』」を開始します。
「虐待してしまつ大人も助けたい」を目標に掲げ、全国をまたに講演に飛び回る大阪の映像制作会社社長、島田妙子さん(42)。写真には、小学2年から中学2年までの6年間、繼母と実父から「2度死にかける」ほどの虐待を受けました。結婚後には、義父母の介護や障害をもつた長男の子育てと、人生の試練に次々と直面しました。

そんな妙子さんの心の支えとなつたのは1歳違ひの兄の存在でした。しかし、その兄は平成22年12月、40歳で死去。それが妙子さんの講演活動の出発点となつたのです。

妙子さんがこの3年間で行った講演は180回、向き合つた聴衆は2万6千人を超えました。連載では、壮絶な妙子さんの半生をたどります。ご期待ください。（月～金曜日に掲載します）

虐待2000日 妙子と小兄 あすから新連載スタート

16日夕刊から新連載「虐待2000日『妙子と小兄』」を開始します。
「虐待してしまつ大人も助けたい」を目標に掲げ、全国をまたに講演に飛び回る大阪の映像制作会社社長、島田妙子さん(42)。写真には、小学2年から中学2年までの6年間、繼母と実父から「2度死にかける」ほどの虐待を受けました。結婚後には、義父母の介護や障害をもつた長男の子育てと、人生の試練に次々と直面しました。

そんな妙子さんの心の支えとなつたのは1歳違ひの兄の存在でした。しかし、その兄は平成22年12月、40歳で死去。それが妙子さんの講演活動の出発点となつたのです。

妙子さんがこの3年間で行った講演は180回、向き合つた聴衆は2万6千人を超えました。連載では、壮絶な妙子さんの半生をたどります。ご期待ください。（月～金曜日に掲載します）

2014年7月16日(水)

妙子と小兄

2

2014.7.17(木)



兄2人に抱かれる妙子。家庭は平穏だった

編集局次長・松田則章

両親の離婚、壮絶人生の幕開け

「小兄」といつも一緒にいた。島田妙子は、小学2年から中学2年まで6年間におよぶ継母と実父からの虐待を乗り越えられたのは、「1つ違いの兄、浩二郎がいたから」と思っていた。2人の糸は特別だった。

妙子は昭和47年2月、六甲山のふもとにある神戸市北区の団地で、父の定純、母の和子の長女として生まれた。上2人が男の3人きょうだい。いづれも1歳違うの年子だった。父はトレーラー運転手、母は保険外交員として働いていた。おぼろげな幼い日の記憶では、3人とも真冬でも半袖、半ズボン、はだしに靴。妙子は兄の着古しのエリが伸び切ったTシャツを着て、靴も兄のお下りだった。靴の絵柄は男児用の「仮面ライダー」だった。

それでも、妙子にとって家庭は楽しい場所だった。両親2人の間にはすきま風が吹いておらず、2人そろって家にいることはめったになかった。そのためか、浩二郎がいつも妙子の面倒を見た。

「オマエ、妹を連れてくんないよ」。浩二郎が近所の友達と近くのため池や洞窟に遊びに行こうとするとき、決まってこうクギを刺された。

だが、妙子は浩二郎にくつづいて離れない。危険すぎる遊び場に連れていくのがしたたつた。明らかに夫婦げんかの痕跡であった。

「きょうでお母ちゃんは出でいく。お前はどうする」

妙子が家に帰ると珍しく玄関に父と母の靴と一緒に並んでいた。部屋に入ると、茶碗が散乱し、壁にはしないゆがしたたつた。明らかに友達と別れ、公園で妙子と2人で遊んだ。とにかく妹思ひだった。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

■妙子5歳 昭和52年初夏

妙子が家に帰ると珍しく玄関に父と母の靴と一緒に並んでいた。部屋に入ると、茶碗が散乱し、壁にはしないゆがしたたつた。明らかに夫婦げんかの痕跡であった。

「きょうでお母ちゃんは出でいく。お前はどうする」

妙子が家に帰ると珍しく玄関に父と母の靴と一緒に並んでいた。部屋に入ると、茶碗が散乱し、壁にはしないゆがしたたつた。明らかに友達と別れ、公園で妙子と2人で遊んだ。とにかく妹思ひだった。

「セッタイお父ちゃん」と答えた。

妙子は「あたしはお母ちゃん」と言つたが、定純は「アカン。きょうだいは何があつても一緒や」と怒鳴り、結局3人とも定純が引き取ることになった。

両親の突然の離婚。それが妙子の壮絶人生の幕開けだった。

（敬称略、登場人物は一部仮名です）

妙子が家に帰ると珍しく玄関に父と母の靴と一緒に並んでいた。部屋に入ると、茶碗が散乱し、壁にはしないゆがしたたつた。明らかに夫婦げんかの痕跡であった。

「島田家をどうにかせんといかん会議」。団地住人が集まり、そんな話し合いがもたらされたのは数日後のことだ。5歳の幼な子が昼間1人で階で火事があり、1人暮らしの高齢男性が亡くなった。その火事の中、妙子は1人部屋で寝ていた。

「妹が家にいるんだ。助けて」。消防活動が続くなかった。消防隊員に叫んだ。幸い妙子は無傷だったが、火事は妙子ら3人の人生を急軽させた。

「島田家をどうにかせんといかん会議」。団地住人が集まり、そんな話し合いがもたらされたのは数日後のことだ。5歳の幼な子が昼間1人で居ることはもちろん、夜遅くまでようだい3人だけの生活は常軌を逸したもので、周囲も放置できなかつたのである。

結論は、妙子ら3人の児童相談所行きたつた。3人とともに訪れた相談所の応接室、職員に子供を託して去り際、定純の目に涙があふれた。定純は何も言わず、ただ妙子の手を何度も強くギュギュと握りしめた。定純自身が、子供のところ孤児院で育っていた。それだけに思いはまだ、強い親子の糸で結ばれていた。親にとても子にとってもつらい別れだった。

(敬称略)

編集局次長・松田則章

父と別れ、児童相談所へ



妙子が小学校入学を控えた年の1月、団地1階にあった妙子宅の上の3人きょうだい。左から小兄、妙子、大兄

■妙子5歳 昭和53年正月過ぎ

妙子が小学校入学を控えた年の1月、団地1階にあった妙子宅の上の3人きょうだい。左から小兄、妙子、大兄

■妙子5歳 昭和53年正月過ぎ

両親が離婚し、島田妙子はすぐ上の小兄、浩二郎と2つ上の大兄、純一郎とともに、父・定純と暮らすことになった。母親の不在で幼い3人きょうだいの生活はすさんだ。

定純は仕事から帰ると、夕食を作り、風呂に入れ、懸命に子育てした。妙子の幼稚園の弁当も作つたが、保護者の送迎が半ば義務だった幼稚園に朝が早い定純は同伴できず、妙子の足は徐々に幼稚園から遠のいた。

妙子は昼間、神戸市北区の団地の部屋で1人過ごすようになった。面倒を見る者はなく、ほつたらかし。妙子は、スーパーのチランから好きなものを切り取つて皿に並べる「ままでご遊び」をし、空腹を覚えると冷蔵庫にあるダイコンやニンジンを生でかじった。その後浩二郎は、給食のパンやチーズをランドセルに入れてこつそり持ち帰つてくるようになった。

「おいしか」。そう尋ねる浩二郎に妙子はニッコリ笑つて「うん」と答えるのだった。

妙子と小兄

3

2014.7.18(金)

虐待2000日

妙子と小兄

4

2014.7.22(火)

父の定純が再婚した。
島田妙子ら3人きょうだいが児童相談所から養護施設に移り半年たつたころ、定純が若い女性を連れて面会に来た。

「会社の同僚の倫子さんや」。いつもよりにこやかな定純に紹介されたあと、3人と定純も作つたが、保護者の送迎が半ば義務だった幼稚園に朝が早い定純は同伴できず、妙子の足はまだたが、この日は、妙子の指定席だった助手席に倫子が座つた。目的地の大坂・万博公園の遊園地で、倫子が作つてた弁当を食べながら妙子は、別れた母・和子のこと思い出していた。

その後も定純の面会には倫子が付いてきた。そしてタイミングを見計らい2人は再婚した。定純32歳、妙子の継母となった倫子は22歳。妙子が小学1年の冬休みだった。倫子は、別れた母・和子のことを思い出していた。

結婚を機に、定純はきょうだい3人を引き取り、兵庫県三木市の新興住宅地にある一戸建てで新生活をスタートさせた。

■妙子7歳 昭和54年冬

最初は順調だった。妙子は倫子に宿題をみてもらつたり、一緒に風呂に入つたり。仲の良い母娘であつた。しかし、まもなく倫子が妊娠、そして出産を間近に控えた小学2年の冬、倫子が豹変した。

「ちよっとオー」

妙子たちが2階の子供部屋にいるところ、階下から倫子が呼ぶ声が聞こえてきた。怒りを帶びた不機嫌な声。しばらくすると、大きな腹を抱えた倫子がドスドスと音をたてて階段を上がってきた。

「人が呼んぐるのに、なんですかに来うへんのや」

倫子はこれまで見たことのない形相で怒鳴り、プラスチック製の靴べらで妙子の左腕を思いつきたいた。妙子が驚き、痛さに腕をさすつてしゃくして、1歳上の小兄、浩二郎が学校から帰ってきた。泣きほらした妙子を見て「どうないしたん」と聞いた。

虐待の始まりだった。

（敬称略、登場人物は一部仮名です）

妙子たちが2階の子供部屋にいるところ、階下から倫子が呼ぶ声が聞こえてきた。怒りを帶びた不機嫌な声。しばらくすると、大きな腹を抱えた倫子がドスドスと音をたてて階段を上がってきた。

「人が呼んぐるのに、なんですかに来うへんのや」

倫子はこれまで見たことのない形相で怒鳴り、プラスチック製の靴べらで妙子の左腕を思いつきたいた。妙子が驚き、痛さに腕をさすつてしゃくして、1歳上の小兄、浩二郎が学校から帰ってきた。泣きほらした妙子を見て「どうないしたん」と聞いた。

編集局次長・松田則章

妙子の作った弁当が、妙子の実食ながら、妙子の実母・和子だった

妙子と小兄

5

2014.7.23(水)

妙子と小兄

6

2014.7.24(木)

妙子と小兄

7

2014.7.25(金)

■妙子7歳 昭和54年冬

「継母の本性がみえた」。小学2年の冬、初めて倫子に靴べらでたたかれたとき、妙子はそう感じた。1歳上の小兄、浩二郎は学校から帰つておらず不在だった。

「妙子どないしたん」

たたかれた左手をおさり泣きはらす妙子を見て、帰宅した浩二郎は驚き尋ねた。安心感からか、妙子の泣き声は大きくなるばかり。まるで赤ん坊のようにワンワン泣いた。

間もなく、大兄、純一郎が2階の子供部屋にあがってきた。倫子が呼んでいるという。3人居間に下りると、妊娠し腹が大きな倫子はこたつに深く体を入れ、靴べらでたつ布団をたたきながら言つた。

「言つとくけど、アンタらが悪いことした

ら、今日からしつけとしてたたくからな。でないとアンタら悪い大人になつてしまつ。それから、お父さんは仕事で疲れて帰つてきはるんやから、たたかれたとか言つたらアカンでえ。ええな」



イラスト・中川将幸

朝まで正座、一晩中立たされ…

強い口調で一気にまくしたてる。倫子の「鬼」のスイッチが入ったのだ。

その日を境に虐待が本格化した。氣に食わないことがあると靴べらでたたかれた。洗濯や食器洗いは妙子の仕事になった。朝、一通りの家事ををして学校に行く。帰つてきて、少しでも気に入ることがあると、靴べらでたたかれた。3人きょうだいの中でも同性だから、妙子は特につらくなられた。典型的な継母のいびりだった。

妙子が虐待を受けると、浩二郎は「お母さん、やめたって」と懇願した。すると倫子は「気持ちわるッ。兄弟愛出しゃがって」と、今度は浩二郎を何十回も靴べらでたたいた。虐待に使う靴べらはプラスチックから、すぐにステンレス製に変わった。さらに、つねつたり、素手でたたかれたりと暴力はエスカレート。そして、その後の虐待の定番となる、朝まで正座させられる「寝たらあかんの刑」、一晩中立たされる「つづ立ちの刑」も始まったのであった。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

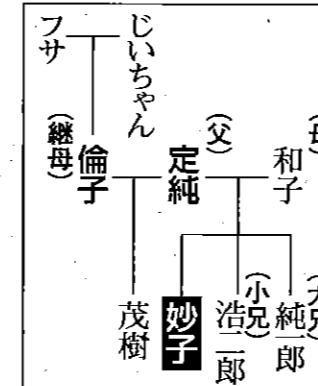
編集局次長・松田則章

■妙子8歳 昭和55年秋

産院を退院し自宅に戻ると、倫子の世話をするためしばらくの間、倫子の母、フサが一緒に暮らすことになった。妙子にとっては「はあちゃん」。最も近い肉親の存在で、「(倫子は)優しくなるかも」と、妙子は期待を膨らませた。しかし、倫子はやはり倫子だった。家事はフサ任せ、茂樹の世話も、妙子や小兄、浩二郎の役目だった。そして、鳴りをひそめていた虐待が徐々に戻つてきた。

■妙子8歳 昭和55年秋

茂樹がつかまり立ちをし始めたころ、立ちそこねて、脣をこたつの端で打つことがあった。よくある失敗だが、運悪く茂樹は血を流した。倫子が血相を変えて居間にとんでき



継母の本音が聞こえた

力任せにビンタを妙子にくらわせた。「今日という今日は絶対許さん」。倫子は、妙子を裸にして全身を靴べらでめつた打ちした。体中にみみずばれができる。「もうイヤや。お父ちゃんに言つてやる」。妙子はそう叫んだ。

その夜、父の定純は倫子と大げんかした。寝ていた妙子が飛び起きるほどの大聲と物音が、居間から2階の子供部屋まで聞こえてきた。倫子の子供たちに対する虐待を初めて知り、定純は激高、けんこつで倫子を殴つたのだった。妙子が目覚めたあとも階下で2人の言い争う声が続いた。

そのとぎだ。「自分で産んだわけでもないクソガキの面倒を、誰がみてやつてると思うどんネン」。開き直った倫子の声だった。

その罵声を聞きながら、妙子は「やっぱりお父ちゃんはウチらの味方や。これでたたかれたくて済む」と安堵し、再び眠りについたのだった。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

編集局次長・松田則章

■妙子8歳 昭和55年冬

その日は朝から雪が降つていた。仕事が休みだった定純は屋間からビール、日本酒と飲み進めた。そのうち倫子が、妙子らのことをあれこれ愚痴り始めた。妙子が「アア…折檻が始まる」と思った瞬間、酔つた定純と目が合つた。定純の前でも虐待を露さなくなり、間もなく定純自身が暴力をふるつよつとなつた。

■妙子8歳 昭和55年冬

そのまま外に飛び出した。「助けて」。外では隣家の親子が雪遊びをしていたが、妙子に向かってそう叫んだが、さすがに倫子は動かなかつた。定純は自分で台所に包子を取りにいった。

妙子ははだしのまま外に飛び出した。「叫んだ」「助けて」。外では隣家の親子が雪遊びをしていたが、妙子に続いて包子を持って玄関から飛び出してきた定純に驚いた。世間体もあり、見かねた倫子に止められ、定純はわれにかえつた。

しかし、定純の怒りが収まつたわけではない。傷心の妙子はその日、いつもより早く風呂に入った。突然定純が入ってきて、妙子の髪をつかみ頭を湯船の中に沈めた。何度も何度も…。

「もうアカン」

もううつとする意識の中で妙子はそう思った。今度も倫子が制止しない。定純はようやく収まつた。そのとき、定純は倫子に向かって捨てせりふのように叫んだのだった。

「これで、氣が済んだやろ」

この日の出来事を妙子は「お父ちゃんは継母にマインドコントロールされていた」と思つてゐる。騒ぎ立てる倫子を抑えることができず、虐待に追い込まれたのではないかと。湯船の折檻が終わつたあと、定純の顔には涙が浮かんでいた。妙子はそう記憶している。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

編集局次長・松田則章

「もうアカン」。湯船に顔を押ししつけられ、妙子の意識は遠のいた

虐待2000日

妙子と小兄

8

虐待2000日

妙子と小兄

9

虐待2000日

妙子と小兄

10

父の定純からきつい折檻をされた翌日、島田妙子は小兄・浩二郎と2人で家出した。「この家にいっては殺される」。子供心にそう思ったのだった。

■妙子8歳 折檻の翌日

普段通りに学校に行き授業を受けた後、妙子は浩二郎と示し合わせた学校近くの駅に向かった。先に来て待っていた浩二郎は、「コニコシながら言つた。

「オレ、十円玉9枚も持つてんネン」

「うわあー、すごいヤン」。妙子はうれしそうに答えた。

90円を握りしめ、小学4年と3年の2人は歩いた。雪が降りしきる暗い空だったが、不思議と寒さは感じなかった。知らない景色が広がり、そのうちに日が暮れて真っ暗になった。

空腹を覚えて雑貨店でインスタントラーメンを買い、公園で2人で分け合つて、生のままぱりぱり食べた。

満足感に浸つていると、暗闇の中で2つの光が近づいてくるのが見えた。パトロール中の警察官だった。

「何人の恩人に助けられ生きてきた」。42歳の妙子は今、そう実感している。その恩人の一人が、倫子の実母で、妙子が「ばあちゃん」と呼ぶフサだった。弟の茂樹が生まれ、世話をするために妙子らと一緒に住むようになったフサは、最初、倫子の虐待を強く注意した。しかし、その都度、「絶対逆らわん」といって、「しつけに文句いわん」といふと怒る倫子のけんまくに、だんだん口を出さなくなつていった。それで、倫子や定純から妙子らきょうだい3人を守る場面が何度もあった。

「ばあちゃん」の優しさに涙
（敬称略、登場人物は一部仮名です）



妙子と浩二郎は手をつなぎ、見知らぬ道を歩いた

編集局次長・松田則章

2014.7.28(月)

小兄・浩二郎との家出から3ヶ月ほどたつた日曜日、妙子の父・定純と継母の倫子は当時日課となっていたパチンコにも行かず、珍しく家にいた。

■妙子9歳 昭和56年早春

昼過ぎに2階の子供部屋に上がってきた定純は、いつにも増して不機嫌な表情を浮かべていた。「ランドセル持つて下に来い」。いぶかしく思ひながらも従つたきょううだい3人は、命じられるままに車に乗つた。定純が運転し、助手席には倫子。30分ほど走り、車は見知らぬ住宅街に止まつた。しばらく沈黙が続いたあと、「ちょっと降りて」と倫子が言った。後部座席のドアを開けて妙子ら3人を降ろし、定純が告げた。

「今日でお別れや。あの角に児童相談所があるから行つてこい」。定純は逃げるよ

うに車に乗り込み、すぐに発進させた。

「え？」

3人は何が起つたのか分からず、しばしばつぜんとした。「ポイ捨てされたんぢやう」。しばらくして浩二郎はニヤッと笑い、こう口を



イラスト・中川将幸

児童相談所前に「ポイ捨て」

開いた。それで緊張感が和らいだ妙子も「ホンマにイ」と返した。

「児童相談所」。建物の看板にはそう記されていた。そこは、当時住んでいた兵庫県三木市から20キロほど離れた明石市だった。

玄関は閉まつており、インターホンを押して用件を伝えた。「お父さんとお母さんに、ここに行けつていわれました」。出てきた職員に浩二郎が説明した。

驚いた職員だったが、それでも3人から身元を聞き出し、倫子の実家に連絡した。しばらくして駆けつけてきたのは、倫子の父親のじいちゃんなど、兄のオッチャンだった。職員は定純に連絡しようとしたが、つながらなかつたのだ。

ウソのような、子供のポイ捨て。その理由はオッチャンの家におり、協議の結果、3人はそのまま3週間滞在することになった。

「アンタらみたいなええ子は幸せになる。絶対死ぬとか思つたらアカンよ」。妙子も浩二郎も、フサの優しさにたゞ泣き続けた。

（敬称略、登場人物は一部仮名です）

編集局次長・松田則章

2014.7.29(火)

児童相談所前にポイ捨てされた妙子らきょううだい3人は3週間後、再び父と継母、弟と暮らすようになつた。しかし、パチンコによる借金が発覚したことから、一家は兵庫県三木市の家を売り払い、神戸市兵庫区のアパートに引っ越した。

■妙子9歳 昭和56年春

部屋は6畳一間。それを2部屋借り、親子6人と、監視役の倫子の母・フサの7人で生活した。薄いため、隣室の話し声もテレビの音も筒抜け。風呂はなく炊事場も共同で、天井ではネズミが走り回つた。

引っ越しに伴い、妙子は4度目の転校をしたが、このぼうアパートが原因で生まれ初めて初めて、学校でいじめを受けた。アパートのことは恥ずかしくて友達にはひた隠しにしたが、アパートの前に別のクラスの男子が住んでいたことから、学校中に知られるこ

とになったのだ。

「バイキンマン」

学校で無視され始めた妙子は、クラスマートとすれば違つた際に、そんな悪口をさらやかれることがあつた。給食当番のときには、配ったパンを「食べられへん」と言われた。心無い言葉が妙子の心を刺した。幸いだったのは、このアパートにいる間、倫子と定純からの虐待がほとんどなかつたことだ。ホステスの女性、夜な夜なマージャンに興じる大学生。さまざまな隣人がいたが、それらの人々とのふれあいは刺激的でもあつた。

結局、このアパートでの生活は1年足らずで終わり、一家は神戸・ポートアイランドに新しくできた3LDKの団地に引っ越すことになつた。

いじめを招いたオンボロアパートが抑制的だったこともあり、42歳の妙子はいま、懐かしい思いでこの時期を思い出すことがある。（敬称略、登場人物は一部仮名です）



昭和50年代の神戸の街並み。
妙子は兵庫区に引っ越した

編集局次長・松田則章

2014.7.30(水)

妙子と小兄

11

妙子と小兄

12

妙子と小兄

13

2014.7.31(木)

午前2時半。それが、島田妙子が暮す1歳年の上の小兄、浩二郎の起床時間だった。中学1年の遊びたい盛りだが、雨の日も風の日も新聞販売店に勤務し、チラシの折り込みをして朝刊を配り、学校から帰ったら夕刊を配った。アルバイトの目的は自分の制服代を継母の倫子に返すためだった。

そんな生活が1年ほど続いたころ、浩二郎が体に変調を来たした。喘息が持病で、幼いころから発作を繰り返していたが、このころ、頻繁に発作が出るようになっていた。新聞配達を休まざるを得ないとさには、妙子が代わりに配った。結局、療養が必要と診断され、団地の近くの病院に入院。その病床で「新聞配達どうするんや」と、思いやりのかけらもない言葉を吐く倫子だった。

体調は改善せず、浩二郎は神戸・ポートアイランドの団地から、遠く離れた兵庫県三田市の専門病院に転院した。父の定純も倫子も難色を示したが、学校の先生の提案に同意せざるを得なかつたのである。とはいへ、一番ショックだったのは妙子だった。

「小兄がいなかつたら、わたしはどうしたらエエの」

浩二郎が入院「どうしたら…」

■妙子12歳 昭和59年

中学生の制服代を親に返すため、小兄は雨の日も風の日も新聞を配った

午前2時半。それが、島田妙子が暮す1歳年の上の小兄、浩二郎の起床時間だった。中学1年の遊びたい盛りだが、雨の日も風の日も新聞販売店に勤務し、チラシの折り込みをして朝刊を配り、学校から帰ったら夕刊を配った。アルバイトの目的は自分の制服代を継母の倫子に返すためだった。

そんな生活が1年ほど続いたころ、浩二郎が体に変調を来たした。喘息が持病で、幼いころから発作を繰り返していたが、このころ、頻繁に発作が出るようになっていた。新聞配達を休まざるを得ないとさには、妙子が代わりに配った。結局、療養が必要と診断され、団地の近くの病院に入院。その病床で「新聞配達どうするんや」と、思いやりのかけらもない言葉を吐く倫子だった。

体調は改善せず、浩二郎は神戸・ポートアイランドの団地から、遠く離れた兵庫県三田市の専門病院に転院した。父の定純も倫子も難色を示したが、学校の先生の提案に同意せざるを得なかつたのである。とはいへ、一番ショックだったのは妙子だった。

「小兄がいなかつたら、わたしはどうしたらエエの」

浩二郎が入院「どうしたら…」

■妙子12歳 昭和59年

中学生の制服代を親に返すため、小兄は雨の日も風の日も新聞を配った

小学6年の小兄、浩二郎の最大の楽しみは、5月の修学旅行だった。浩二郎は指折り数えてその日を待った。しかし、そのささやかな希望を、継母の倫子が容赦なく打ち碎いた。

■妙子10歳 昭和57年春

旅行当日の朝、妙子が目覚めると、浩二郎は口に粘着テープを貼られ、布団ごとロープでぐるぐる巻きにされていた。「どうしたン?」。妙子がロープをほどこうと手を出すと、その場にいた倫子に思いつき蹴られ、柱に頭をぶつけた。

「もう少しこのままではいたら許したるから。アンタ(妙子)はご飯の用意して学校に行かんかいな」

修学旅行の集合時刻を過ぎた午前7時15分ごろ、倫子は学校に電話した。「(浩二郎は)喘息の発作が出てしまって…。残念やけど、旅行はやめますわア」。浩二郎は小さいころから喘息を患っていた。それが嘘に利用された。

その日、妙子が学校を行っている間に倫子は浩二郎に言った。「旅行やめたら、お金がナンボか返ってきてください」ときも、「妙子がいるから」といつも自分のことは「の次にした我慢強い少年だった。そんな浩二郎が泣き叫ぶ姿は、シヨックの大きさを物語っていた。小さいころ、悲しいとき、寂しいときも、「妙子がいるから」といつも心配いなかった。そんな浩二郎が泣き叫ぶ姿は、シヨックの大きさを物語っていた。

浩二郎は脳腫瘍、ずっと押し入れにこもった。しかし、妙子が学校から帰ってくると、押し入れから出てきて「やられたわア」とぼつり。浩二郎は脳腫瘍、ずっと押し入れにこもった。しかし、妙子が学校から帰ってくると、押し入れから出てきて「やられたわア」とぼつり。

「小兄、おなか減ってへん?」と、妙子は、浩二郎のために持ち帰った給食のアドウパンをラップセルから取り出した。そのときにはもうスッキリとした表情を浮かべ、「ワワー」と喜んで浩二郎は、半分を妙子に差し出すのだった。事で2人は心中に潜んでいた思いをはつきりと意識することになった。「早く大きくなつて家を出たい」と。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

編集局次長・松田則章

パチンコで多額の借金をつくり、家を売り払う事態にまで追い込まれた父の定純と継母の倫子だったが、パチンコをやめる気配は一向になかった。負けではイライラし、妙子らぎょうだい3人に対して、相も変わらず虐待を繰り返した。

■妙子11歳 昭和58年春

妙子らの前で「自分の子供でもないのに面倒を見させられて」という倫子が、高額の制服代をすんなり支払うとは到底思えなかった。浩二郎は「お下がり」がないか、自力で心当たりを探した。しかし、小さく瘦せた体に合う制服はなかなかなく、入学式が近づくにつれ浩二郎の心配は大きくなつていふのだった。

制服新調のための採寸が行われ、支払期限が迫つて来たある日、倫子が浩二郎と妙子、大兄の純一郎を呼び、言った。

「制服ひつよつ…」

小兄 浩二郎が中学に上がるうことになった。小兄 浩二郎が不安を払拭できずについた。

編集局次長・松田則章

小兄 浩二郎が中学に上がることになった。小兄 浩二郎が不安を払拭できずについた。

■妙子12歳 昭和59年

3人は怒る怒る祖父母の自宅を訪ねた。心配をよそに祖父はバス停まで迎えに来ており、自宅前で待っていた祖母は3人を見ると涙ぐんだ。すしの出前を奮発し、5人で楽しい時間を過ごした。しかし結局、制服代のことは持ち出せなかつた。帰り際に祖父母は、3人にそれぞれ500円ずつ小遣いをくれた。

「アンタんどこの娘が生んだ子を育ててやつててるのに、毎月養育費くらい出すのが当然やろ」

3人の帰宅後、目的を果たせなかつたことを知った倫子は、祖父に電話して怒りをぶらまけた。しかし、3人がもらった計1500円はきちんと取り上げる倫子だった。

そして結局、制服代は、浩二郎が新聞配達のアルバイトをして倫子に分割返金することでやりがついたのである。

小兄 浩二郎と妙子だったが、この出来事で2人は心中に潜んでいた思いをはつきりと意識することになった。「早く大きくなつて家を出たい」と。

たぐましい浩二郎と妙子だったが、この出来事で2人は心中に潜んでいた思いをはつきりと意識することになった。「早く大きくなつて家を出たい」と。

■妙子10歳 昭和57年春

旅行当日の朝、妙子が目覚めると、浩二郎は口に粘着テープを貼られ、布団ごとロープでぐるぐる巻きにされていた。「どうしたン?」。妙子がロープをほどこうと手を出すと、その場にいた倫子に思いつき蹴られ、柱に頭をぶつけた。

「もう少しこのままではいたら許したるから。アンタ(妙子)はご飯の用意して学校に行かんかいな」

修学旅行の集合時刻を過ぎた午前7時15分ごろ、倫子は学校に電話した。「(浩二郎は)喘息の発作が出てしまって…。残念やけど、旅行はやめますわア」。浩二郎は小さいころから喘息を患っていた。それが嘘に利用された。

その日、妙子が学校を行っている間に倫子は浩二郎に言った。「旅行やめたら、お金がナンボか返ってきてください」ときも、「妙子がいるから」といつも心配いなかった。そんな浩二郎が泣き叫ぶ姿は、シヨックの大きさを物語っていた。

浩二郎は脳腫瘍、ずっと押し入れにこもつた。しかし、妙子が学校から帰ってくると、押し入れから出てきて「やられたわア」とぼつり。

「小兄、おなか減ってへん?」と、妙子は、浩二郎のために持ち帰った給食のアドウパンをラップセルから取り出した。そのときにはもうスッキリとした表情を浮かべ、「ワワー」と喜んで浩二郎は、半分を妙子に差し出すのだった。事で2人は心中に潜んでいた思いをはつきりと意識することになった。「早く大きくなつて家を出たい」と。

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

14



10枚が妙子の命をつないだ

十円玉握りしめ教師に電話

編集局次長・松田則章

2014年8月5日(火)

妙子の父、定純は神戸・ポートアイランドの団地自治会で会計を担当していた。妙子が中学2年に進級して1ヶ月ほどたったころ、定純が預かっていた自治会費約40万円がなくなつた。

継母の倫子がパチンコに使つたのだったが、定純に問い合わせられた倫子は「この子らが取つたんに決まつてやろ」としらを切つた。

激怒した定純は、妙子の首を絞め、止めに入つた大兄、純一郎の頭をガラスの灰皿で殴つた。頭から血が噴き出し大兄は昏倒した。慌てた定純が、ぱっくりと割れた大兄の頭の傷を裁縫セットの針と糸で縫い騒ぎになつた。

■妙子13歳 昭和60年春

翌日、純一郎は家を出、中学3年だった小兄、浩一郎は友達の家に行つた。そして妙子も、中学の学年主任の男性教師から連絡用に渡されていた十円玉10枚を持つて家を出た。学年主任は、妙子に対する家庭での虐待を感じ取り、「アカン」と思つたら、電話していくんやで」と自分と担任の庄治恵子の電話番号を書いたメモとともに、十円玉を妙子に渡していたのだった。

妙子が目指した先は庄治の家だった。

27歳の体育教師。当時人気の女子プロレスラーのリングネームから

「マッハ先生」のあだ名がつけられ、生徒から慕われていた。しかし、いざ電話しようと思つてもでき

ない。決心してはやめ、決心しては思いどまりを繰り返して、結局、庄治ではなく学年主任に電話したとき、あたりはすでに真っ暗だった。

「もしもし」。声を絞り出した妙子だが、次の言葉がでこない。察知したのか、学年主任は「島田か。今どこや。先生が行くから場所いうて」と勢いこんだ。指定された場所で妙子が待つていると、到着した学年主任は、ほつとした表情と満面の笑みを浮かべ「ああ良かった」と漏らした。

妙子はその日、学年主任が連絡した生活指導主任の自宅に泊まつた。フカフカのベッドで妙子は安堵しながら、なかなか寝付けない夜を過ごした。長い虐待の日々が終わりを迎へようとしていた。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

妙子と小兄

15



今は中学校長を務める庄治。「虐待してるでしょ」の一喝で、妙子は救われた

編集局次長・松田則章

2014年8月6日(水)

妙子が担任の庄治恵子ら教師3人に保護を求めた翌日、妙子は庄治とともに中学校に向かつた。

■妙子13歳 運命の日

中学校の応接室に入ると、父の定純、継母の倫子が硬い表情でソファに座つてた。学校から呼び出されたのだった。倫子にキツイ視線を向けられ、たじろぐ妙子。後ずさりしそうになつたが、庄治が腰に回した手で包むように妙子を支えていた。

同席していた校長が、虐待の事実関係を定純と倫子にやんわりとだした。

「妙子さんの顔や体のアザはあなた方がしたものですね」

「それは上の子が…」

大兄、純一郎のせいにして言い迷れようとはだかった。

「違うでしょ。あなたたちが虐待したんでしょ」

実は、妙子はこの数日前、庄治に

虐待の事実を伝えていた。「幼い頃はやさしくて大好きだったお父ちゃんが逮捕されたら…」と恐れ、詳細には話さなかつたが、先生に対して初めて虐待を打ち明けたのだった。

庄治はすべてを了解し、「ワタシが守る」と妙子に伝え、即座に先輩教師に連絡した。学年主任が妙子に連絡用の十円玉10枚を渡したのは、そのときだつた。

この時期、妙子は徐々に家庭の実態を周囲に明かし始めていた。同じクラスの親友のヨツチに虐待のさわり話をしたとき、ヨツチは「タエちゃん、きょうは帰るのヤメたら。アタシが何とかする」と、心当たりの友人に声をかけ、妙子が別の女子の家に泊まる」ともあつたのだ。

連絡用の十円玉10枚を渡したのは、そのときだつた。

妙子が養護施設を無断で抜け出したのは、「小兒に会いたい」の一心からだつた。この前まで住んでいた

団地に行き、インターネットを押した。出てきたのは浩一郎。一瞬驚いた表情をみせたが、すぐに笑みを浮かべ、中に招き入れてくれた。定純二郎がいないことを除いては。

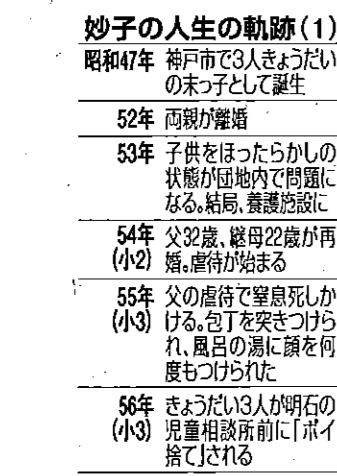
■妙子13歳 昭和60年冬

元来、心やさしい人だつた。小学2年から中でも虐待を加えた父・定純のことを、妙子はそう思つてゐる。2度にわたつて妙子は死のるかっていた」と。中学の担任教師らの連携で虐待が終了したあと、定純と倫子は離婚した。すでに中学校を卒業し働いていた大兄の純一郎は家を出て、妙子は養護施設に入った。小兄、浩一郎だけが、定純とともに、家族がそれまで住んでいた団地で暮らすことになつた。虐待を耐え抜いたきょうだい3人の新生活が始まつた。

妙子が暮らした養護施設は神戸市兵庫区にあり、定純と伦子は離婚した。すでに中学校を卒業し働いていた大兄の純一郎は家を出て、妙子は養護施設に入った。小兄、浩一郎だけが、定純とともに、家族がそれまで住んでいた団地で暮らすことになつた。虐待を耐え抜いたきょうだい3人の新生活が始まつた。

妙子と小兄

16



今は中学校長を務める庄治。「虐待してるでしょ」の一喝で、妙子は救われた

編集局次長・松田則章

2014年8月7日(木)

妙子の人生の軌跡(1)	
昭和47年	神戸市で3人きょうだいの末子として誕生
52年	両親が離婚
53年	子供をほったらかしの状態が団地内で問題になる。結局、養護施設に
54年	父32歳、継母22歳が再婚(小2)。虐待が始まる
55年	父の虐待で窒息死しかける。包丁を突きつけられ、風呂の湯に顔を何度もつけられた
56年	きょうだい3人が明石の(小3)児童相談所前に「ボイ捨て」される
60年	担任教師の一喝で2000日に及ぶ虐待が終わる

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

優しさ取り戻した父、自殺図る

そう話す定純は昔のやさしかつた父だった。そして「妙子、ほんま悪かったなあ。ほんますまんかった」と何度もわびた。

「昔のお父ちゃんが戻った」と、妙子の心の中のわだかまりが徐々に氷解していった。翌年のクリスマス、定純が服毒自殺を図った。

定純は幼いころに両親と生き別れ、施設で育つていた。妹がいたが母親に引き取られて東京にいた。定純はその後何回か妹に会つており、アドレス帳に連絡先が記されていた。小兄が連絡すると「兄の面倒を見たい」と強く主張する。そして、定純の東京行きが決まったのだった。

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

17

2014年8月8日(金)

虐待を受けていた中学1年のころ、妙子は卒業したら家を出て働くと決めていた。「和歌山県の旅館で仲居さんになる」。そう思ったのは、テレビドラマの影響だった。

■妙子15歳 昭和62年早春

その妙子が卒業後、上京することになった。中学3年のクリスマスに父の定純が服毒自殺を図った。一命はとりとめたものの、後遺症が出て、東京に住む妹のもとで療養することになったのだった。中学2年で虐待が終わった後、定純から謝罪もあり、心中のわだかまりは徐々に解けつつあるときだった。

「東京で働きながらお父ちゃんの看病をしたい」。そう妙子が言い出すと、すでに中学を出て働いていた小兄の浩二郎は「じゃあおオレも行く」と話し、2人そろっての上京が決まった。上京を前に、妙子は弟の茂樹にどうしても会いたかった。妙子ら3人がようやくいへの虐待を主導したのは、きょうだいへの虐待を主導したのは、たあとに始まつた。生まれた子供が離婚するが、妙子は弟がかわいかなかった。

離母の倫子で、虐待は倫子が妊娠したあとに始まつた。生まれた子供が離婚し、倫子は離婚、母親のフサとともに神戸市長田区で暮らしていった。屋はパート、夜はスナックでアルバイトをして生計を立てた。卒業式を間近に控えた3月、妙子は、茂樹が通う保育所にそりそり行き、そこで茂樹と再会した。妙子を見つけると、茂樹は「お姉ちゃん」と笑顔で駆け寄ってきた。2人に心の隔たりはなかつた。

「あんたって娘は…」

訪ねてきた理由を説明すると倫子は泣いた。「茂樹のことを思つてくはれたんや。ありがと」。虐待のさなには「クソガキ」とまで呼んだ繼母の変化に、妙子は驚いた。そして「人は変われるんや」と思つた。帰り際、倫子は「最近、寂しくて仕方ないネン」とつぶやいた。

妙子と倫子。2人はその後の人生でも、かかわり続けるのである。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)



父の看病のため妙子は上京することになった

父の計報が届いたのは、妙子16歳の夏だった

妙子と小兄

18

2014年8月11日(月)

父・定純の看護のため上京した島田妙子だったが、東京での生活はわずか3ヶ月で終わつた。

定純の看護先は、東京郊外にある、定純の妹の家近くの病院だった。妙子と小兄の浩二郎は、妹の家に住ませてもらい、アルバイトをしながら病院に通つた。はじめは親切だった妹だが、定純の介護の負担から次第に精神状態が不安定となり、妙子らにつらくあたるようになつた。そしてついに妙子は「神戸に帰つてほしい」と告げられたのだった。

■妙子16歳 昭和63年盛夏

8月、定純の訃報が届いた。

東京を去つた後、妙子は、神戸に本社のある冷凍食品会社に社員として採用されていた。その会社に連絡が入つたのは脅過ぎのことだ。上司の世話を、急いで東京に向かう新幹線に飛び乗つた。

定純が安置されたのは、東京郊外の寺だった。最寄りの駅まで電車で行き、そこから寺までタクシーで向かつた。すでに日は暮れていた。

見るからにおのぼりさん風の少女の一人旅。妙子の事情を根掘り葉掘り聞き出そうとするタクシーの運転手は「今から寺にいってもだれもないよ。一緒にどこかに泊まるうか」と話しかけてきた。慌てた妙子は、「ああ迎えが来ています。もうそこで結構です。降ろしてください」と、半ば強引に下車した。住んでいたこの記憶をたどりながら歩いて寺に向かつたが、到着すると日付が変わつていた。

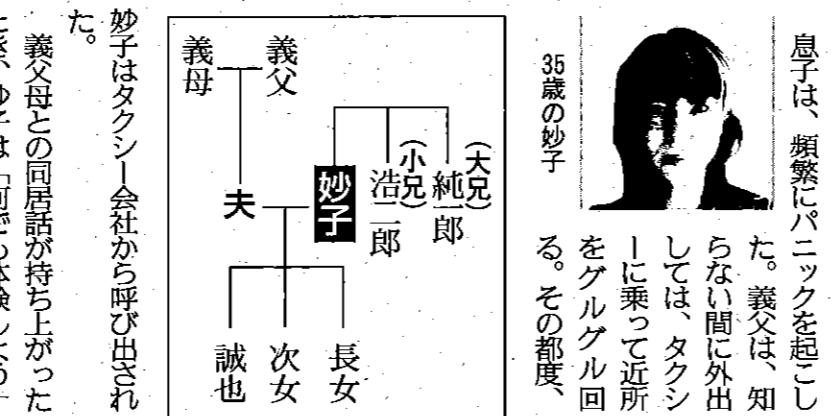
ひつぎの中の定純はガリガリに瘦せていた。翌日の葬儀に小兄は列席できなかつた。勤務先の神戸での仕事を終えてからバイクで東京まで駆けつけることになつていてが、間に合わなかつたのだ。

定純は幼いころ孤児院で育つた。妙子らと同様に両親が離婚していたが、葬儀には、生き別れたその母親も来た。妙子には祖母にあたる。孤児院で待つてゐるところ、祖母が大儀そうに言った。「何時までかかるかなあ。夕方に歯医者の予約が入つているのよ」

ひどい母親、ひどい妻…父は女運が悪かつた。定純の人生を振り返り、そう思う妙子であった。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

女運悪かった父の死



妙子と小兄

19

2014年8月13日(水)

妙子は19歳で大阪の映像制作会社に転職し、編集して販売する会社だった。経理を担当したが、もともと何でもやってみたいタイプ。

休憩時間や終業後に先輩社員のところに行つたが、撮影や編集を教えてもらつた。「上手やない」と告げられたのだった。

22歳で結婚した。間もなく娘が生まれ、仕事を離れた。続いて娘、息子の3人の子供を授かり、子育てに追われるようになつた。「子供には愛情を注ぎたい。何から何まで世話をしたい」と思ったのは、虐待を経験し親の愛を感じられなかつた反動だったのだろう。

しかし、幸福感もつかの間、新たな試練が相次いで襲つた。認知症の義父と車いす生活の義母を世話をするようになつたのは33歳のときだ。同じころ、息子の誠也がアスペルガー症候群と診断された。

22歳で結婚した。間もなく娘が生まれ、仕事を離れた。続いて娘、息子の3人の子供を授かり、子育てに追われるようになつた。「子供には愛情を注ぎたい。何から何まで世話をしたい」と思ったのは、虐待を経験し親の愛を感じられなかつた反動だったのだろう。

妙子と小兄

20

妙子と小兄

21

妙子と小兄

22

最愛の兄が白血病に



小兄が白血病に。妙子は骨髄移植のドナーとなった

小兄、浩二郎の異変を、妙子が知ったのは平成21年の正月だった。妙子は36歳になっていた。毎年、正月や盆には、大阪府北部にある妙子の自宅に、大兄の純一郎、浩二郎、繼母が生んだ異母弟の茂樹の家族たちが集まり、にぎやかな宴を開いていた。多いときには子供を含めて20～30人にもなった。

大勢の中でたまたま妙子が、浩二郎と隣同士になったとき、妙子は浩二郎の前に大きなかぶがあるのを見つけた。

「何それ。あす、すぐ病院行き」

胸騒ぎがした妙子は、キツイ調子で浩二郎にそう言った。このころ浩二郎はタクシー運転手をしていた。さまざまな職業を経て運転手の職についた浩二郎は、激務の傍ら労働組合の役員もこなし、仕事も家庭も充実していた。

妙子にとって浩二郎は特別な存在である。

6年間におよぶ継母と父からの虐待を耐え抜いたのは、「小兄がいる」という互いの存在、心の支え合いがあったからだった。

その小兄の変調は妙子自身の変調で

もあったのだ。

病院での診断は急性骨髄性白血病、即日入院だった。

抗がん剤治療と手術で、いつたん退院したものの、1ヵ月後に再発した。残された手段は骨髄移植だけとなつた。

「何があつてもわたしの骨髄をあげたい」

骨髄移植は提供する側と受ける側の型が適合するかどうかが問題だが、妙子は「適合しないはずがない」と確信していた。

妙子とともに純一郎も骨髄液の検査を受け、ともに適合と診断されたが、浩二郎は迷わず「妙子のいきたい」と言った。妙子と同様に浩二郎も「普通の兄妹の関係ではない」と考えていたのだ。

移植は成功した。しかし、安心もつかの間、浩二郎は移植の影響で、肺炎にかかりやすくなったり、服薬が臓器に影響したりで、再移植を迫られることになった。

今度は、浩二郎の高校生の娘が自らの骨髄液提供に同意した。そして、浩二郎は再度、骨髄移植に臨むことになった。

(敬称略)

編集局次長・松田則章

2014年8月14日(木)

継母の孤独死…虐待水に流し



38歳の妙子。この前年、継母が孤独死した

妙子が死んだとき、白血病の浩二郎は、たまたま退院していた。倫子に対して恨み骨髄のはずの浩二郎だったが、すべてを水に流して倫子を見送った。それが小兄だった。

(敬称略、登場人物は一部仮名です)

編集局次長・松田則章

2014年8月18日(月)

妹の到着待ち兄は逝った



イラスト・中川将幸

た。妙子は、浩二郎が危機を乗り越えてくれることを祈りながらも、心と頭の片隅では「死」も覚悟していた。意識が戻ることを祈って、いや最期の見送りのため、次々と駆けつけてきた親族とともに全員でいろいろなことをした。アスペルガー症候群の長男、誠也がパニックに陥った際、妙子がするまじない「魔法のパウダーかけ」。タレントの植木等の歌に合わせて、妙子がパウダーをかけるふりをすると、誠也の発作は不思議にピタッと治まったのだ。

耳になじんだその歌を誠也が歌い始めた。妙子も口ずさんだ。すると、浩二郎の3歳の息子が幼稚園で習っている歌を歌い出した。みんなも歌う。泣きながら、笑いながら。

病室には、悲しみとぬくもりが交じり合つた。不思議なやさしさが充満した。枕元では、打つ手がなくなり臨終を告げようとする医師と看護師がおえつを漏らしていた。

そして小兄は逝った。

40歳、あまりにも早すぎる死だった。

(敬称略)

編集局次長・松田則章

小兄、浩二郎が白血病で闘病していたさなかの平成21年、6年間にわたって島田妙子らしきようだい3人を虐待した継母の倫子が死んだ。1人で暮らしていたアパートの部屋で遺体が発見された孤独死だった。

妙子は、中学2年で虐待が終わり父の定純と倫子が離婚したあと、倫子と関係を保っていた。中学を卒業し東京に行くことになったとき、異母弟の茂樹に会いたい気持ちが抑えきれずに訪れた際、倫子は自分の非を悔いて妙子にわびた。その後は、自堕落な生活を続ける倫子に金を無心されることがほとんどだったが、妙子はできる限りその求めに応じた。無心が茂樹にいきなりようにという気持ちからだった。

死の1ヵ月前、妙子は倫子と会っていた。茂

樹が独立したあと、倫子の家はごみ屋敷と化した。もともと家事は苦手で、虐待のさなかには、小学生だった妙子に炊事や掃除をさせていたほどだ。妙子は「これが最後」と、お金を出し、

団地住まいの倫子の部屋を清掃しリフォームした。

新しくなった部屋で倫子はそう言いい、虐待の許しを請つた。「あなたたちにしたことがいつも残つていて、何を張ろうと思つてもあかんねん。許して」

伦子が死んだとき、白血病の浩二郎は、たまたま退院していた。伦子の葬儀のため、寺の手配などにこまめに駆け回ったのは、その浩二郎だった。

楽しみにしていた修学旅行の当日、伦子に布団でぐるぐる巻きにされ出発を阻まれたことがあった。返

金されるわざかな旅行費用をパチンコ代に回そうという、さもしい目的だった。中

学の制服代が惜しくて、すんなりとは買つてくれず、結局、浩二郎は新聞配達のアルバイトで制服代を伦子に返したのだった。

伦子に対して恨み骨髄のはずの浩二郎だったが、すべてを水に流して伦子を見送った。

それが小兄だった。

妙子の1歳違いの兄で、「小兄」と慕い続けた浩二郎が危篤になつたのは平成22年12月7日未明のことだ。急性骨髄性白血病で2度にわたる骨髄移植を受け、「寛解（白血病細胞が見つかなくなつた状態）」と診断されたものの、副作用として肺炎を発症し再入院していた。

妙子は、頻繁に病院へ見舞いに行つていた

が、この時間はいつたん自宅に帰っていた。

寝室で携帯電話が鳴った。ディスプレーに表示されたのは小兄の妻の名。「亡くなつたか」と覚悟を決めて電話に出たが、違つた。

「妙子さん。パパが妙子さんを待つてゐたが、この時間はいつたん自宅に帰つた。

伦子が見舞いに来ていた。アラームが鳴りっぱなしやのに…。絶対に待つてゐねんわ。す

ぐ来て」

大阪府北部の自宅近くのインターチェンジで

高速道路に乗り、浩二郎が入院する兵庫県西宮市

市内の病院まで、長男と、数年前からともに暮らすようになった実母の和子を乗せて妙子は車を飛ばした。

「小兄來たでえ。ちゃんと來た

明るくそういうながら、妙子が病室に入ると、枕元に浩二郎の妻がい

て、「小兄來たでえ。ちゃんと來た

頭の片隅では「死」も覚悟していった。

意識が戻ることを祈つて、いや最

期の見送りのため、次々と駆けつけ

てきた親族とともに全員でいろいろ

なことをした。アスペルガー症候群の長男、誠

也がパニックに陥った際、妙子がするまじない

「魔法のパウダーかけ」。タレントの植木等の

歌に合わせて、妙子がパウダーをかけるふりを

すると、誠也の発作は不思議にピタッと治まつたのだった。

耳になじんだその歌を誠也が歌い始めた。妙子も口ずさんだ。すると、浩二郎の3歳の息子が幼稚園で習っている歌を歌い出した。みんなも歌う。泣きながら、笑いながら。

病室には、悲しみとぬくもりが交じり合つた。不思議なやさしさが充満した。枕元では、打つ手がなくなり臨終を告げようとする医師と看護

師がおえつを漏らしていた。

そして小兄は逝った。

40歳、あまりにも早すぎる死だった。

(敬称略)

編集局次長・松田則章

2014年8月19日(火)

妙子と小兄

23

2000日にもおよぶ虐待をともに耐え抜き、互いに家庭をもつてからも支え合って生きてきた。

「普通の兄妹とは比べものにならない、かけがえのない存在。小兄が亡くなつたらわたしはもう頑張られへん」

1歳違の兄、浩一郎が病に倒れて以降、妙子はずつとそう思い続けてきた。幼いころからいつも妙子を助け、守り続けてくれたやさしい兄だった。中学校の制服代を稼ごうと新聞配達のアルバイトをした頑張り屋。継母と父にきょうだい3人が児童相談所前に「ポイ捨て」されたときも動じなかつた。妙子と一緒に家出をし、1つのインスタントラーメンを分け合つて食べたこともあつた。その小兄が死んだのだ。

放心状態がしばらく続いたあと、なんとか平靜を取り戻した妙子は浩一郎の主治医に呼ばれた。

「妙子さんに伝えでほしいといわれことがあります。浩一郎さんは、死後、軸体を申し出られていました」

静を取り戻した妙子は浩一郎の主治医に呼ばれた。

「妙子さんに伝えでほしいといわれたことがあります。浩一郎さんは、死後、軸体を申し出られていました」

21年 小兄、浩二郎が白血病に
22年 映像制作会社社長に
浩二郎が死亡
23年 講演活動を開始

妙子の人生の軌跡(2)

主治医はそう告げた。新薬開発など医学発展のために自分の体を使つてほしい。浩一郎はそう願つていたのである。

浩一郎は生前から、新聞やテレビで虐待のニュースが流れるたび、妙子に「また虐待があつたなあ」と憂慮するメールを送つてきた。壮絶な虐待を経験した2人だから、社会のために何かできることがあるのでないか。浩一郎はいつも「人の役にたちたい」と妙子に言つていた。入院してからは「元気になつたら、子供たちを守るためにNPOを作る」と、具体的な夢を妙子に語つていた。

「もう頑張られへん」と思つていた妙子だったが、主治医の言葉を聞いて、一瞬にして気持ちが切り替わつた。

「わたしにできることはすべてやろう」

その時点では、具体的な像を描けてはいなかつたが、何かをしなければという思いが妙子の心に芽生えたのだった。

(敬称略)

妙子と小兄

24

小兄、浩二郎が亡くなつた次の週、妙子にあてた手紙が自宅で見つかった。「妹へ」とタイトルがつけられていた。

「」の2年間は、本当に迷惑をかけました。(骨髄移植の)ドナーにもなつてくれたり、俺の命を助けるために協力していただきた事、心より感謝します。

死んでいくのが嫌なので、文章に残しますね。全然兄貴らしい事をしてやれなくて、ゴメンよ。妙子には、ほんとにいつもパワーをもらいました。

妹やけど、お前のことは心から尊敬していますよ。これからまだまだ母として、会社代表として、俺の分も頑張つて下さい。

万が一、死んだ場合、妻は冷静にはいられないと思うので、葬式関係は任せたよ。なるべく、なるべく、安くあけて下さい。

叶うなら、小さくてもいいからお墓は建てほしいな。親父を入れる



小兄から妙子にあてた遺書「妹へ」

妹へ手紙「人生やり直したいなあ」

ようなら一緒に入れてほしいな。
死ぬまで迷惑かけっぱなしやな。
ごめんな。

今までありがとう。

戻れるのなら、あの幼稚園まで戻つて、人生をやり直したいなあ。感謝

「会社代表」とは、妙子が平成22年4月に設立した映像制作会社のことだ。子育てが一段落し、請われて仕事にカムバックしたのだった。とはいえる、会社の経営状況は悪でなく、妙子と二人三脚の人生を歩んできた浩一郎は「運転手をしてでも妙子を助けたい」と常々言つていた。

そして、浩一郎が記した「幼稚園」は、父と、妙子ら幼かつた3人きょうだいが、笑いながら暮らした神戸市北区の団地の中にあつた。

妙子は、どんな環境にあっても前向きで周囲を気遣つていた小兄を思い出した。そして、「人生をやり直したいなあ」のくだりに、小兄がだれにも漏らさなかつた渴望を読み取り、ただ涙するのであつた。

(敬称略)

妙子と小兄

25

小兄、浩一郎が亡くなつて約1ヶ月後の平成23年1月10日、妙子は大阪市淀川区の大坂研修センターで、人生初の講演を行つた。

演題は「e - l o v e s m i l e」(イ・ラブ・スマイル)。妙子が1年ほど前に社長となつた映像制作会社のキャラチフレーズだった。浩一郎が存命中にすでに開催が決まつていた。妙子を応援したい」と自らの夢を託して、いた闘病中の浩一郎に、「生きる希望を与えたい、勇気づけたい」と妙子がサプライズで計画したのだった。

会場には友人、知人をはじめ約80人が集まつた。満員で100人の収容力だから、ほぼ満員の状態だった。妙子は自己紹介し、その後アスペルガー症候群の子供をもつ親としての子育て、認知症の義父の介護など主婦としての体験を話そうと考えていた。しかし、話は思わず方に向に展開した。

演壇に立つた妙子は、かつて経験したことがないほど緊張していた。口から胸元までカラカラ。聴衆の顔を見る余裕などない。うつむき加減で「ここにちは、島田妙子です」と一気にしゃべり、つばをのみ込みプロフィルを語り始めた。すると、思われぬ言葉が自分の口から出た。

「実は、子供のころ、継母と実父に虐待されていたんです」

こんなことを話すはずじゃない!と思ったが、話し始めると次から次へとエピソードがあふれ出た。それまで虐待されていた過去を他人に話したことではなく、心中に封印していた記憶だった。

1時間後。心を占めたのは反省ばかり。話す内容は予定外、「あのう」を繰り返し、髪をさわったり顔をかいたりと講演はボロボロの出来だった。帰りの電車で、「ゼッタイ、もう二度と講演なんかやるか」と自分嫌悪に陥つた妙子だった。

ところが、予期しない反響が寄せられた。映像制作の仕事の受注先で、顔見知りの幼稚園長が電話してきたのは翌日のことだった。

妙子はあせんとするばかりだった。



(敬称略)

妙子と小兄

26

2014年8月25日(月)

島田妙子の2回目の講演は、平成23年2月、地元の大坂府北部で開かれた。1月の最初の講演を聴いた妙子の知人が「ぜひ」と要望したのだった。さんざんの出来で「もう一度やるものか」と、自己嫌悪に陥った講演だったが、思いとは別に反響は大きかった。

「本はない」「自伝を読みたい」。講演終了後、出口で来場者を見送っていると、出てく人出てくる人、同じ言葉を吐く。他人とは少し違う人生とは思っていたが、「虐待された体験を明かすなんて…。自分の過去に虐待なんてなかった」と思い込むようにして生きてきただけに、聴衆の声が妙子には不思議に思えた。

翌月から書き始めた。覚悟を決めてから動き出すまでの間はいつも早い。鮮明に覚えていること、記憶の断片からようやく引き出したこと、あやふやなところは大兄の純一郎にひとつひとつ確認した。居間は会社の自室で、夜は家事を終えたあと居間でパソコンに向かった。6時間連続で書き続けたこともあった。

波に乗っていくと、書くことは次から次へとあふれ出た。虐待の始まり、風呂の湯に顔をつけられ死にかけたこと、児童相談所への「ポイ捨て」、そして小兄（浩二郎）の最期。

「わたしは小兄のこと」が書きたいのかも」。書き始めてすぐ、妙子はそう気づいた。あらゆる場面で、妙子のそばに浩二郎がいた。妙子にとっては兄であり、父であり、ヒーローだった。書きながら涙があふれて止まらなかつた。

時間を使って書き続け2週間後、小学校3年の家出の場面にさしかかったとき、すでに1冊分の分量を超えていた。上下2巻とするよう方針転換し、最終的に書き上げたのは6月。途中はほとんど校正に費やしたから、実質の執筆時間は1ヶ月半程度だった。

最初の講演のテーマと同じ「e 1 o v e s m i l e」をタイトルに23年7月20日、上巻を出版。9月20日には下巻を発刊した。ともに300ページ強、イラストをふんだんに入れ、暗い話を暗くしないようコミカルさも演出した。

妙子がメディアに取り上げられ評判が広がると、本の販売も増加。25年には「第16回日本出版文化賞エッセー部門賞」を受賞した。

(敬称略)

一気に書き上げた自伝
「e love smile」

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

27

2014年8月26日(火)

「子供をバチコーンとやつてしまつ」と、わたしもありました。でも悩むことはない。その日のうちに子供に謝って。そして『めっちゃ好きやで』つていてください」

小兄・浩二郎の死をきっかけに妙子が始めた講演は、平成23年に12回、24年52回、25年82回と、年を追うごとに増えていった。

講演のテーマを「虐待」と本格的に定めたとき、妙子は「虐待をしてしまった大人も助けたい」を目標に掲げた。虐待は悪と認識しながらも、イラライラして一時の感情で暴力をふるつてしまふ親が罪悪感にさいなまれ、それが次の虐待につながることを、父・定純の姿を見て知っていたからだった。

当初は、壮絶な試練を乗り越えてきた妙子に共感しながらも、「虐待する親は絶対許せない。それを助けるなんてどうしよう」と怒りをぶつける聴衆も少なくなかつた。そんな声には、ついに自分の考えを説明し、理解を得る努力を続けた。

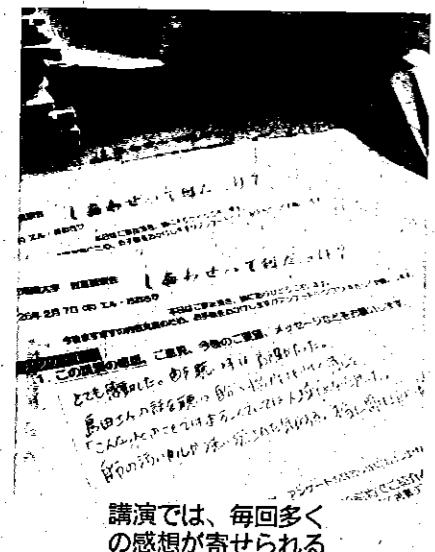
当初、自らの被虐待体験がほぼすべてだった講演だが、子育てやじめ、若者気質と、徐々に内容は厚みを増していく。

「命の奇跡」「愛と信頼」「幸せのレベル」など、波瀾万丈の人生でたどりつけた真理に特別な斬新さはないが、実体験に基づく説得力のある話ぶりや、伝えたい思いにあふれた熱のこもった口調と相まって聴衆の心をグイグイつかむ。

「お金が入ったらほしいものを買つてしまふ。そうではなくて必要なものを買うべきです。幸せのレベルを上げすぎると、満足のレベルが高くなってしまう」

「受精して生まれた私たちほんの、精子が卵子に着床するまでの数億分の一の競争を勝ち抜いて生まれた。誕生してきたことがすでに奇跡なんですね」

(敬称略) 登場人物の一部は仮名です



講演では、毎回多くの感想が寄せられる

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

28

2014年8月27日(水)

講演、研修、座談会…。妙子の評判は口コミで広がり、出演要請が増えるに従って実際に虐待やダメスティックバイオレンス(DV)に悩む人々からの相談も寄せられるようになった。「わたしの講演に、あなたの旦那を連れてきて

兵庫県南部に位置する市の公民館。講演を終え、控室に引き揚げてきた妙子が、夫のDVに悩む20代の女性に、こう告げたのは平成24年冬。「虐待する大人も助けたい」を掲げて始めた講演だが、一方で「全員を助けることなどできはしない」と、個別の相談は極力控えめにしていたからだった。

数日後、女性は「DV夫」を連れて、約束通り講演にやってきた。

「おまえナニサマや。他人の家庭に首を突っ込んで」

開口一番、夫は目をつり上げ、妙子を恫喝した。いきなり夫の怒りを受け止めあと、妙子は友達に話すように「今度、一緒にお酒飲まへん?」と誘つた。夫の人生をどうぞん聽いたのは、さらに数日後のことだ。

夫との話は3時間に及んだ。夫の父親は酒乱で、日常的に母親に暴力をふるつた。母親はじつと耐えていたが、結局離婚。「これで安心して生活できる。オレがお母ちゃん支えたら」と思ったときに、母親は男をつくり家を出ていったのだった。

「裏切られた」

夫は絞り出すよつに語り、涙を流した。そして、母に裏切られた思いの反動が妻への強い束縛や、やきもちの延長線上にDVがあることを打ち明け、悔いた。話すことで夫の心はときほぐされていったようだつた。

「人はゼッタイいつか死ぬ。死ぬ生きたか、人にどう接したか。大切なのは愛と信頼やよ」

妙子は夫に、この人生観を披露した。それは、死の床で苦しむ小兄・浩二郎が妙子に語った言葉だったのである。

(敬称略)

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

29

2014年8月28日(木)

「虐待をしてしまつ大人も助けたい」。妙子の思いは一途で強い。講演活動の芯にあるのは「虐待の本を絶つ」とのことだ。だが、日々生起してそれが可能なのかとの疑問もわくのだ。

報道される虐待事件の数、態様をみると「果たしてそれが可能なのか」との疑問もわくのだ。5月27日に京都市の龍谷大学で開かれた授業で、こんな場面があった。妙子は同大短期大学部准教授の赤田太郎（教育学、臨床心理士）、学生代表の2人とともに「先生とはどんな存在」のテーマでパネルディスカッションした。「経験上、虐待している親はそんな簡単に変わらないんですね。だから子供をセラピーしています」

児童養護施設で、虐待された子供たちへのセラピーを11年間にわたって続けている赤田は、いきなり妙子に「直球」をぶつけた。

「これに対し妙子は、虐待が終わったあと中学2年を養護施設で過ごした経験として、『入所している子供に』何か

してあけたいと思うたり、ふびんな子という思いを持たないでほしいんです。大人が本気で守ってくれていると感じたら、子供は元に戻るのだから」と発言したものの、虐待する親



龍谷大で学生らと語り合う妙子

性善説…たどりついた信念

の更生については言及しなかった。赤田は言う。「記憶も残っていない0～3歳時の虐待された原体験は、親の間違った子育てを無自覚に

学習し、その後の子育てを左右する。この時期に虐待を受けた子供は、成長し親になっても人に対する信頼感が持てず、かつての生活環境を再現するため、自らの子供に虐待をしてしまう『連鎖』が起りやすい

連鎖を断ち切るには、信頼できる大人の存在が不可欠となる。妙子は、虐待してしまった大人については、常々じつ考へている。

「ひんなにひどい虐待をしてしまつ人であつても、人間は劇的に、一瞬にして変わる」とができる。宝くじが当たるときのように、だから、そのきっかけとなればと思って、自分の体験や（その体験からたどりついた）考え方伝えている」

妙子の根本は、強烈な人間への信頼、徹底した性善説である。それは、壯絶な虐待や次々と襲う人生的荒波を乗り越えてきた妙子がたどりついた信念。そして、志を果たせず逝った小兄、浩二郎の思いでもあるのだ。（敬称略）

編集局次長・松田則章

妙子と小兄

30

2014年8月29日(金)

平成23年1月に初めて講演して以来、妙子は、小学2年から中学2年まで約2000日に及んだ壮絶な被虐待体験を赤裸々に語り続けている。全国を飛び回る講演では、恩人たちとの予期しない再会が一度ならずあった。

24年春、虐待から助け出してくれた中学の担任教師、庄治恵子と27年ぶりに再会した。今は神戸市立魚崎中学校長となっている庄治のもとを訪ねた妙子は言った。

「庄治先生のことがずっと気になつていました。連絡しようとすればできたのに、不義理てしまつて」

その妙子に、庄治は「親子の仲を引き裂いてしまつた。あの子は生きているのだろうか」と心配していたが、生きていってくれてよかったです」と喜んだ。2人は正反対の心配を胸に、長い間、互いを気遣つて生きていたのだった。

虐待を受けていたさなか、妙子を自宅に泊めてくれ、「守ってくれた」同級生と再会するきっかけとなつたのは、25年8月の神戸での講演会。終了後に若い女性が話しかけてきた。「さつきのお話にでてきた同級生。わたしの母親です」

今年5月には、中学2年で虐待が終わったあと一時預けられていた施設の女性職員と再会した。講演中、「見たことのある人たなあ」と思ひ、施設の実名を出してみた。すると、その女性が大きく目を見開いたのだった。講演が終わつたあと、2人で涙を流し抱き合つた。

今年7月末、妙子は久しぶりに魚崎中に庄治を訪ねた。昔話や近況を語り合つうちに、庄治は感慨深げに、こう漏らした。

「あんなにやせてガリガリ。視線はうつむき加減で、目に光がなく、黒い顔色をしていた生徒が、こんなに立派になつて」

妙子は11月、庄治の仲介で、魚崎中校区を含む地区のPTA集会で講演する。それは、壮絶な人生を支えてくれた人たちへの「恩返し」であり、妙子の信念「人は変わることができる」の証明でもある。そして、妙子は改めて誓つたのだった。

「小兄（浩二郎）の思いを伝えながら生きていきたい」と。

（敬称略）

（敬称略）

編集局次長・松田則章



妙子（右）と庄治。11月には庄治の仲介で妙子が講演する